

このコーナーの発案者で第1執筆者の今井さんに「路地への思い」を描けと言われた。路地協の事務局をして9年になるが、はて？路地にそんなに思いがあったかと考えてみた。

私は、東京浅草の観音裏の旅館の建物で幼少期を過ごした。生まれは浅草雷門二丁目となっている。両親ともに、地方出身なので江戸っ子ではない。(そもそも浅草は江戸の外だったので、もとより江戸っ子ではないのかもしれない。)父親が山っ気のある人間だったので、親からもらった小金を元手にいろんな事業に手を出した。浅草では、「久吉館」という旅館と「花の素顔」というキャバレーを経営していた。経営していたというか、従業員に任せっきりで、ご推察のとおり多額の借金の果てに当時走りのライオンズシステムという等価交換で都落ちということになった。

で、この久吉館という旅館が幅員4mに満たない路地に面して建っていたのである。私が物心ついた頃は、既に旅館は廃業していた。私の寝室は1階の客間で、食堂は玄関脇の帳場、勉強部屋は仲居さんの更衣室と、なんだか広々と使っていた。

久吉館は、言問通りという片側3車線幅員27mと言う幹線道路(環状3号線)からほんの40mほど路地を入った位置(その路地に面しているのは片側のみの4軒で、我が家は3健軒目)にあった。路面は舗装しておらず土である。昭和30年代後半はまさに高度成長の絶頂期で有り、言問通りの交通量は現在より多かったのでと記憶している。その当時の車であるから当然騒音は凄いものであったが、小学校から言問通りを歩いて帰ってきて一步家の前の路地に入ると、言問通りの喧噪は気にならなくなるのである。

我が家の隣は芸者さんが暮らしており(置屋だったのか?)よく隣の家の前に人力車が迎えに来ているのを見かけたものだ。で、芸者さんが稽古で三味線を奏でるのであるが、この音色が路地の中に静かに染みいって行くのだ。当然当時の私にそんなこと思う感性はなかったのだ。これは今私が勝手に当時を想像しているに過ぎないが・・・。

この芸者さんの家のおばあさんが花好きで、家の前に花を飾っていたと記憶している。今みたいなプラスチックのプランターでもなく、ましてや発泡スチロールの空き箱でもない。植木鉢に植えられ、その植木鉢も行儀良く並んでいた。その花を前にして、私の母親も含めて近所のマダムたちが良く立ち話をしていたのを覚えている。

また、我が家は旅館であるから、当然庭が有り、池が有る。それはいいのだが、玄関脇に大きなキンモクセイの木が植わっていた。毎年、秋の走りに小さな黄色い花を咲かせ、あの独特な香りをあたり一面に漂わせていた。実は、子供ながらに私はこの木が好きだった。理由はよくわからないが、好きで有り、自慢であった。この時期に家の前の路地で遊んでいると、近所のおばさんや通りかかりの人に、いい香りですね、立派なキンモクセイですね、と言われることがうれしかったのだと思う。路地なので、通りかかりの人がそういるはずもないので、たぶん言問通りを歩いていて香りに誘われて路地に入ってきた人も多いのだろう。

浅草のイベントで三社祭は別格として、5月31日・6月1日と6月30日・7月1日の2回に行なわれるお富士さんの植木市(現在は開催日が違うようである)が、私は最も好きだった。それは、あの路地での会話なども原因しているのかも知れない。

路地の思い出としては、よく遊びよく怒られた。狭い路地で野球をやるのだから、当然破壊したガラ

スは1枚や2枚ではないだろう。2件隣に同学年（確か学校区境で2つの小学校のどちらも選択でき、通った小学校が違ったと思う）の子供がいてよく遊んだが、バットを振っていて彼の顔を誤ってバットでたたいてしまったという苦い記憶もある。その子の家は足袋屋さんで、祭装束一式はその子の家で調達した。（当然三社祭である。）そのほかの遊びでは、路面が土だったので、蠟石は使えなかった。メンコは当然したが、ベーゴマはちょっと高くて手が出なかったし、近所にやる子供がいなかった。ゴム縄は妹がやっていた。

また、あの路地での鮮烈な記憶は、クサヤのにおいである。小学校から夕方帰ってきて、路地を曲がった瞬間にクサヤを焼いているにおいが漂ってくるのである。においと敢えてひらがなで書いたのは、大好きだからである。本当は香ばしい香りである。あのにおいをかいだとたん、顔がほころんでしまうのである。私の父のために焼いているのであるが、父の手元に届く前に私がかかなり上前をはねてしまって、よく母親に怒られたものである。今では、なかなかクサヤを焼くのも難しいご時世である。

小中学校の課題で、玄関から見た路地の景色を写生したこともあった。台風が来ると言っては、路地の板塀が倒れないように母屋などと結びつけたりもした。

そんなことを書いている内に思い出したが、路地は工房でもあった。あの時代は、畳屋、氷屋、大工さんなどが、折々にやってきて、あの路地で様々な作業をしていた。当時、大型冷蔵庫がかかなり高価だったのだろう。我が家の冷蔵庫は旅館の業務用の冷蔵庫で、木製の冷蔵庫であった。冷やす冷媒は氷の塊である。氷屋さんが自転車でリヤカー（サイドカーもあった）を引っ張ってきて、家の前の路地でしゃ～か、しゃ～かと歯の浮くような音を立てながら氷の塊を切り出すのである。我々子供たちは、それを飽きずに眺め、氷の切りくずのおこぼれを頂戴するのである。

大工さんもそうである。路地に大工道具一式を広げ作業をするが、なんとと言っても花形はカンナ台である。柱を斜めに寝かせて、カンナをしゅ～っという音を立てながら走らせる。カンナくずが、踊るよに飛び出してくる。大工さんに「危ないからあっちに行きな」と言われながらも、じ～っと見ていたものである。私が子供の頃に将来は大工さんと思った子供も少なくはなかったのではないか。木っ端やかなくずは、ものがなかったあの頃の子供にとっては宝の山であった。

そして、やはり畳替えも一大イベントであった。職人さんが、路地に畳の作業台を設置して手際よく畳表を張り替え、縁をぶっとい針で縫っていく。あの手際とリズムは小気味よいものだった。最後には、おきまりの口に水を含んでの、水の噴霧である。格好いいと思ったものだ。

そういえば、年末に自分たちでやる障子の張り替えも路地でやった。平気で水が使える空間は家の中にはない。あれも最後は、年長者がやる口からの水の噴霧である。水島新司の漫画で「あぶさん」があるが、彼もバッテリーボックスに入るときにバットに酒を吹きかける。

路地がいいと言うよりは、路地は生活の一部＝家の一部であった。年長になって、たまに訪れると、芸者さんの家だけその当時のまま残っている（今はわからない）が、我が家を含めて（と言うより我が家が真っ先に？）建て替わってしまっている。とりあえず記憶がよみがえるのは、この路地のみかも知れない。

現在の私の路地への好奇心は、やはり、うまいものが安く飲み食いできるところ、酔っ払いが安心してはしご酒のできる場所ではないか。表通りは高い店かチェーン店に占拠されている。神楽坂もしかりである。（神楽坂の場合、路地裏にもっと高い店もある）表通りから折れて入る道を横町（横丁）という。そこも魅力的な町である。また、そこから道を折れると裏通り。表通りとは家賃が格段に安いので安い飲み屋がある可能性が高い。特に道が狭い路地ともなると、空間の領域せまく、隠れ家的風情を醸してくる。路地だけがあってもそうはならない。そこに、赤提灯などあるから、安くてうまい居酒屋や

小料理屋があるのではないかという期待。そのカウンターの中には美人の女将がいるのではないかという期待。(美人おかみがいたからと言って、どうこうしようなんてことはないのだが・・・) そんな不純な動機が、その路地を怪しく魅惑的なものになっているのかも知れない。

そんな私が路地協の事務局をしているのだから、路地協が発展しないのは道理だろう。全国路地のまち連絡協議会会員の皆さんごめんなさい。

今井さんに脅されてここまで書いてきたが、どうもとりとめのないものになってしまった。路地に対する思いを、後続の方が高めてくれることを祈るばかりである。